

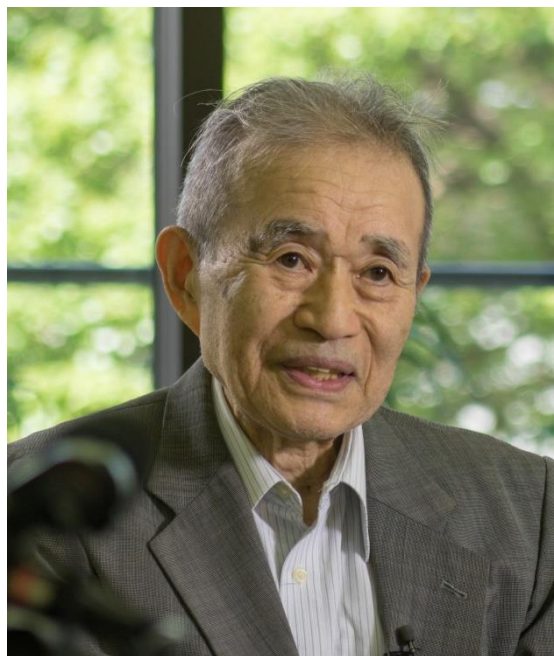
## 17歳の学徒動員兵の広島被爆体験

# 被爆体験記

藤野 守

昭和 20 年8月6日8時 15 分。この日は私にとって生涯で最も衝撃的な体験をした日です。

当時 17 歳だった私は学徒動員で軍需工場へ派遣され工員として昼夜兼行兵器増産に邁進して居りました。夜勤を終え学校の寄宿舎に帰り休んでいた朝でした。空襲警報が鳴り飛行機の爆音が聞こえてきました。「B29 じゃないか」と話していた時、障子越しに強烈な光が走りまわりました。「何やろか」と起き上って障子を開けようと手を掛けたその途端、大きな鞭で全身を叩かれた様な痛みを感じ弾き飛ばされました。一瞬「やられた」と思い意識が遠のきました。



どれほどの時間が経ったのか気がついて立ち上がろうとしたが動けません。天井や瓦の下敷きになっていたのです。何とか這い出して見ると障子・襖・窓ガラス・壁が殆ど吹き飛んでおり、柱と棟木と梁だけが残っていました。トタンで出来た雨樋はまるで蛇のように隣の棟の柱に巻きついており、割れた窓ガラスが粉々になって突きささっていました。幸い私は屋内に居たので火傷は免れました。手足に切り傷、擦り傷を負い左肩を強打し腕が上がりませんでした。しかし当時はこの程度のものは怪我の内には入りません。

暫くして市内の彼方此方から火の手が上がり、街は忽ち火の海となりました。火勢に追われ逃げ場を失った多くの方は防火用水槽や川に飛び込んで息絶えました。勿論家屋の下敷きになり亡くなった人の数はこの比ではありません。辛うじて逃れた者は市内の周辺へと移動しました。

殆どの者が被爆と火災により衣服は焼け落ち、頬や腕の皮膚が剥げて垂れ下がり、その歩く姿はまるで地獄絵図でした。

1時間ぐらいて下級生が学校から帰ってきました。何れも大なり小なり怪我をしていました。特に2年生の○君は全身火傷で最もひどく顔が見る間に腫れ上がり倍ぐら

いの大きさになり、ぶよぶよのコンニャク玉の様  
 でした。「目が見えん、ミズークレー水水水」と  
 泣くばかりでどうすることも出来ませんでした。  
 傷ついた手のひらに蠅が卵を生み付け蛆が湧  
 きました。近くに陸軍の野戦病院があると聞き  
 治療の為彼を運ぶことになりました。寄宿舍に  
 は担架が無かったので雨戸に乗せて行きました。  
 治療と言ってもドラム缶の中の白い火傷の  
 薬を大きな刷毛で、まるで壁にでも塗るよう  
 にペラペラと塗るだけでした。辺りには大勢の負  
 傷者が寝転んでいました。



赤ちゃんを胸の下にかばい死んだ母親の  
 真黒な死体

画：田口光子 所蔵：広島平和記念資料館

その中で特に深く心に刻まれた親子の姿がありました。若い母親が全身火傷で横  
 たわった胸に乳飲み子が乳房を捜している様子です。あの子は無事に育ったでしょ  
 うか？生き永らえておれば 62・3歳。夏が来ると何時も思い出し胸が詰まります。

2日目に寮生は各々の実家に帰ることになりました。O君の看護の為M君と寮長の  
 私が残りました。夕方、O君のご両親が田舎から大八車を引いて連れて帰りました。

寮生全員の無事が確認でき、3日目にM君と私は田舎の実家へと向かいました。  
 市内は電車もバスもありませんので国鉄の駅まで歩きました。

電車の架線を支える鉄柱が熱でグニャリと曲がって倒れていました。道路に筵が  
 敷き詰めてありその上に幾百体となく負傷者が並  
 べられていました。全身火傷で生きているのか死ん  
 でいるのか男女の見分けもつきません。又荷車を引  
 いたままの格好で牛が死んでいました、正座をし、  
 目を見開き北の空をじっと眺めている姿は神社等  
 で見かける銅像の様でした。

あたりは静かで建物の残骸や人の焼け焦げる匂  
 いが満ちておりました。その匂いは数ヶ月も臭覚とし  
 て残りました。死の世界というのはこのような状態な  
 のでしょうか。途中で人に会った覚えが全くなく、た  
 だ一人で歩いて居た記憶しかありません。

当時の场景は 60 余年経ても未だ鮮明に脳裏に  
 焼きついており一生消え去ることはないでしょう。家



鉄柱連続倒壊状況(広島電鉄皆実線  
 沿い) 撮影：岸本吉太 提供：岸本坦

では私はとても助かってはいないだろうと思われていました。「おかえり」ではなく「生きとったか」が最初の言葉でした。被爆にはドクダミが効くとかで煎じたものを毎日朝晩お茶代わりにのまされました。

書き綴れば限りがありません。人が人を殺す戦争なんて何と恐ろしく悲しくて愚かな行為でしょうか。戦争に勝つ為にと徴兵に徴用に多くの人が狩り出され、そして尊い命を落としました。今ある平和と繁栄は此等数多くの方々の犠牲の上に成り立っていることを今一度思い平和が如何に大切であるかを改めて考えて見たいものです。

戦争体験者も高齢化し忘れ去られようとしています。私は現役の時は原爆について殆ど話しませんでした。何故なら世間は被爆者に対し或る種の偏見や風評があったからです。しかし、2005年60年振りに母校を訪ね慰霊祭に参列以降、折に触れ話をするようになりました。

この貴重な体験を語り継ぐことは生き残された者の責務であり又、志し半ばでこの世を去った仲間への供養になるのではないかと思ったからです。核廃絶が叫ばれている今日、核兵器を開発し外交取引の道具にしようとする国、国内では核保持論を唱える若い閣僚がいますが情けない限りです。願わくば地球上から核が全廃され、戦争が無くなりそして地球家族が未来栄劫平和で暮らせる日が来ることを切に祈って止みません。

2005年、被爆60年を記念し其の体験と心境を歌に纏めました。拙い歌ですが読んでいただき何かを感じ取っていただければ幸いです。

#### 藤野 守 詠

- 一、被爆せる友を戸板に病院にペンキ塗る如白い薬塗る
- 一、「ミズークレー水水水」と泣く友にただ見守りて術はなかりき
- 一、幼子は息絶え絶えに抱く母の焼けただれたる乳房まさぐる
- 一、頬も腕も焼かれし皮膚の垂れ下がり被爆の街を人ら歩めり
- 一、被爆した息子を連れて大八車引き行く父母の姿尊し
- 一、生ける者息絶えし者累々と見分けもつかず筵に臥せり
- 一、荷車を引きつつ被爆した牛が銅像の如座して動かず
- 一、三日目に家に帰りし吾を見て「守が生きとった」と驚きの顔
- 一、感無量卒業以来六十年学びの庭の慰霊祭に出る
- 一、灼熱の閃光浴びて六十年不思議と吾は命永らう
- 一、生きのこりし吾は語り継ぐ原爆の怖さ平和の尊きことを